Newsletter from KUIS Research Institutes

vol.12
2026.11.1

神田外語大学 附属研究所 ―― 言語教育研究所 / 日本研究所 / グローバル・コミュニケーション研究所 / 学習者オートノミー教育研究所

「卒業生との共著論文の裏話」　吉村 稔子 先生

『日本研究所紀要』第 18 号掲載の「京都・醍醐寺蔵閻魔天画像の図像について」は、外国語学部英米語学科卒業の齊藤桃香さんの卒業論文の一部を私が改稿して共著で発表した論文です。

齊藤さんは、私の研究演習を 2 年間継続して履修し、一貫して醍醐寺本の研究に取り組んで卒論を書きました。醍醐寺の閻魔天画像とは平安時代 12 世紀の仏教絵画（国宝）です。私自身かつて『醍醐寺大観　第 2 巻絵画』（岩波書店、2002 年）にかかわったこと等から関心のある作品でもありました。

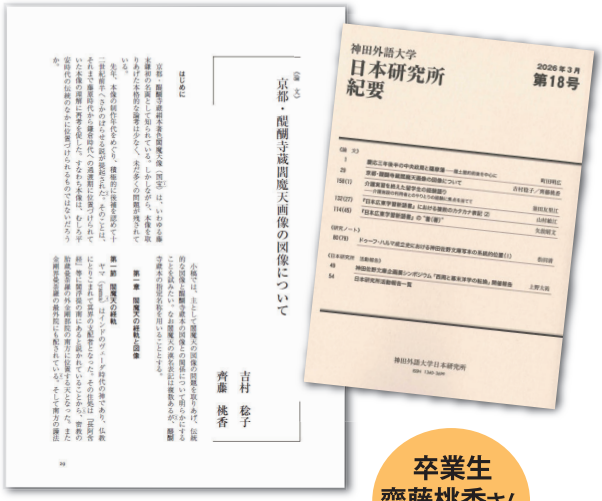
齊藤さんの卒論は、醍醐寺本を多角的に検討し、その制作年代について論じたものでした。醍醐寺本は、従前のいわゆる藤末鎌初（12 ～ 13 世紀）の新様式という解釈に対し、近年 12 世紀前半の伝統様式とする説が提起されており、齊藤さんの結論は後者を支持するものでした。私は卒論講評のなかで、当該論文には様式論よりもむしろ図像にかかわる論述に新知見が認められると評しました。醍醐寺本の閻魔天の身色と乗座の水牛の体色とが共に白色であるのはインド・中国の経典論疏ではなく日本の『秘蔵記』（9 世紀）の所説に依拠しているという発見や、醍醐寺本の閻魔天が向かって斜め左向き構図であるのは空海請来の現図系の図像を採用しているという考察等です。そしてそれらの論述は伝統様式説を補強するものでもありました。

私は齊藤さんの新知見には優れて学術的価値があり、埋もれさせてしまうのは惜しいと考えました。そこで 12 月の卒論提出後、既に就職先の決まっていた齊藤さんに、卒業までもう少し研究を続けないかと誘ったところ、春休みには英語の勉強をしたいと振られてしまいました。やむなく、私が齊藤さんの卒論の新知見を中心に改稿して共著論文として発表することを提案しました。齊藤論文の図像にかかわる範疇をこえないように留意しつつ、構成を整え、論証を大幅に加筆しました。人文科学系の論文は単著であることが一般的ですが、この論文ではふたりともオーサーシップの条件を満たしていると考えました。

本学には様々な知的背景をもつ学生がいます。たまたま私の専門分野に関心をもったひとりの学生が卒論執筆を通して研究というものにチャレンジするさまを見守れたことは、私にとっても僥倖でした。私が幕張の教壇を去る日、齊藤さんとの出会いは最も幸福な思い出のひとつとなることでしょう。



◀齊藤さん（2025 年 3 月英米語学科卒業）と吉村先生



卒業生 齊藤桃香さん コメント

私はもともと日本史と京都が好きだったこともあり、大学でも学べないかと探していたところ、出会ったのが吉村先生の日本美術史の講義でした。講義を通して、何気なく見ていた仏画の背景や奥深さに惹き込まれ、その思いを卒業論文という形にしたいと思うようになりました。

卒論では、醍醐寺の閻魔天画像をテーマに選びました。当初はこの画の色彩や線の儚さに惹かれたのですが、それは絵具が剥落した状態であることを指摘した論文を見つけ、驚いたことを覚えています。この論文を起点に考察すると、本図の制作年代は 12 世紀前半まで遡る可能性があるのではないかと考えるようになりました。一方で、馴染みのない仏教関連の書籍を読み解くことは難しく、研究の方向性に悩むこともありましたが、先生の助言もあってなんとかまとめることができました。

卒業後、吉村先生から、この論文には新たな知見があるため、紀要に発表したいとのお声掛けをいただきました。拙論をそのように評価していただけたことを嬉しく思い、ぜひお願いしたいとお返事しました。

社会人になった今でも、休日には博物館に足を運び、仏画を鑑賞しています。講義を通じて知った仏画の奥深さは、今も私の人生に彩りを与えてくれています。今後も引き続き、何らかの形で日本美術史に関われたら、とひそかに願っている今日この頃です。

【RILAE】学習者オートノミー教育研究所

▼ RILAE トップ

Upcoming Courses (KUIS staff discount available)

■ **Course 4.** Advising in Language Learning 4: Transformation (Becoming an Advisor Educator)
Next course: November 8, 15, 22, 2026 [Registration Closed]
This course is only open to participants who have successfully completed Course 1.

■ **Course 5.** Advising in Language Learning 5: Leading the Change. Taught by Hayo Reinders.
Next Course: January 2027 [live classes: January 10, 17, 24]
[Registration opens soon]
This course can be taken as a stand-alone course.

■ 学習アドバイザー養成プログラム（コース３）
次回開催予定：2026 年 11 月（募集は終了しています）

■ 学習アドバイザー養成プログラム（コース１）
次回開催予定：2027 年 2 月 7 日，14 日，21 日（申込受付中）

Event

17th LAb session. Thursday, December 3rd, 2026 (Online)
Theme: Teacher autonomy for learner autonomy: Agency, reflection, and professional development
Submit a proposal for a short presentation by November 15th.

Invited Researchers

■ **Hayo Reinders** (National University of Singapore), RILAE Senior Research Advisor, gave a workshop on Tuesday 13th October, entitled *Designing for Hybridity, Heutagogy, and Humanization in Language Learning.*

■ **Adelia Peña Clavel** (National Autonomous University of Mexico) will be based at RILAE until December to collaborate in research and exchange information about learner support and self-access.

Publications

New Issue of SiSAL Journal
Studies in Self-Access Learning Journal (SiSAL).
Editors: Jo Mynard and Dominique Vola Ambinintsoa
2026: 17(3) General Issue



RILAE RESEARCH INSTITUTE FOR LEARNER AUTONOMY EDUCATION

Publications by KUIS Colleagues in SiSAL Journal Vol. 17(3)

- Introduction by Jo Mynard and Dominique Vola Ambinintsoa
- Bridging Classroom and Self-Access Learning: Teacher-Advisor Collaboration for Learner Autonomy by Mayumi Kashiwa
- Emotional and Behavioral Insights and Impacts From a Digital Reflective Tool for Learning Advisors by Christine Pemberton, Emily A. Marzin, and Sina Takada
- Facilitating Reflection Using AI-Generated Visual Representations of Metaphors by Haruka Ubukata and Emily Marzin

【日本研】町田明広先生 新刊紹介

プレスリリース▶

シリーズ第４弾　10 月 20 日刊行

『幕末維新史への招待 親幕府派人物 編』



日本研究所所長・町田明広教授が編集した新刊『幕末維新史への招待 親幕府派人物編』（山川出版社）が刊行されました。本書は、これまで十分に語られてこなかった幕閣・幕臣をはじめ、幕府と近しい立場にあった人物たちに光を当てた一冊です。小栗忠順、井伊直弼、徳川慶喜、近藤勇、孝明天皇など 20 人を取り上げ、それぞれの人物の立場や行動、幕府との関わりを読み解くことで、「無為無策で、時代遅れ」といった従来のイメージとは異なる「幕末の幕府」像に迫ります。

□ はじめに―従来のイメージを大きく変える幕末の幕府像　町田明広
□ 第 1 部　幕府の動向を左右した天皇・公家・将軍・一門 編
□ 第 2 部　幕府を指揮した譜代大名 編
□ 第 3 部　さまざまな分野から幕府を支えた幕臣 編
（11 章　岩瀬忠震 幕末外交を動かした「最高峰の知性」とその挫折　町田明広）

シリーズ第１弾
『幕末維新史への招待』
2023 年 4 月 19 日刊行



シリーズ第２弾
『幕末維新史への招待 国際関係編』
2025 年 5 月 20 日刊行



シリーズ第３弾
『幕末維新史への招待 全国諸藩編』
2025 年 9 月 25 日刊行



講演会報告



7 月 3 日、オーストラリア・ニューイングランド大学准教授のイメルダ・デインラ氏をお招きし、GCI 講演会「Reframing the 'Pains of Imprisonment': Solidarity, Justice, and Incarcerated Women in the Philippines（「投獄の苦しみ」を再定義する：フィリピンにおける連帯、正義、そして収監中の女性たち）」を開催しました。

当日は、テーマとなったフィリピンにルーツを持つ学生をはじめ、多様なバックグラウンドを持つ学生が参加し、質疑応答でも活発な議論が交わされました。

講演会報告▶